

悲劇で終わりの物語で
はない

シンラテンセイ

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したもので
す。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を
超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

真名・出生・出典・性別の全てが謎に包まれた存在

人類史上最も奇怪で特異な存在

か
彼の英雄は天体の観測者にして、”中立者”

その名を”名の無き英雄”

—此処より始まるは悲劇で終わりの物語ではない。喜劇で終わりの物語だ—

※暁・P i x i v の同時掲載

※『悲劇で終わりの物語ではない　—i f s t o r y—』別途掲載

目 次

悲劇で終わりの物語ではない |

1

特異点F 『炎上汚染都市：冬木』

11

悲劇で終わりの物語ではない

時は神代

世界の法が物理法則へと移行する遙か以前の太古の時代、現代から6000年以上前の時代

地上には幻想上の存在である幻想種や神々が闊歩する。
周囲には壮大な大自然が広がり、近代の煌びやかな都市の輝きや文明の利器など存在
していない。

大気に満ち溢れるは膨大なまでの魔力

世界には魔術を上回る神秘が満ち溢れ、権能が世界の法として敷かれている。

人類の生命も芽吹き、人々は神々と共に存する。

人類は神々を称え、崇め、信仰する。

頂上の存在にして絶対の超越者である神々

自然現象が具現化し、猛威を振るう絶対者

神々は自分達の永続を絶対とすべく画策する。

神々の衰退を阻止し、神々を廢する可能性を秘めた人間を諫め、地上に繋ぎ止めるた

めの楔として、とある一人の半神半人を創り出していった。

神と人間の双方の血を有し、圧倒的な神性を有した最古にして、後に世界の全てを手の中に収めることになる英雄王を

その名を『ギルガメッシュ』

シユメール初期王朝時代のウルク第1王朝の王である。

彼は人類の観測者にして裁定者

後に抑止力と神々の意思を無視し、人を憎み、人と星の未来を守護し、見定めることを決意した存在

近い将来、楔として生み出された彼は旧時代の遺物として神々を廃し、神々との訣別を決行することになる。

神々がその事実に気付くことはない。

何故なら今、神々は天空からとある一人の存在を見据えていたのだから

奴を『ギルガメッシュ』と遭遇させてはならない、それが神々の総意であつた。

奴は近い将来、必ず神々にとつて魯威になり得る存在だと確信する。

今なお大氣を、地上を、この惑星そのものを震撼させ、力を振るい、惑星の地上全土

に膨大なまでの力を波及させている。

光の極光が迸り、大地が更地と化し、天空にまでその余波が及ぶ。

その拳は山河を碎き、地割れを引き起こす。

惑星外への移動手段も有し、その身には天井知らずのエネルギーを宿している。残像が残るまでの速度、否、神速が如き速度で地上を疾走し、大気を飛翔し、宙へとその姿を現していた。

ダークカラーのローブを着込み、右手には奇抜な装飾が施された杖を有している。首回りにはスカイブルーのリングを浮き上がらせる。

髪の色は黒、紅玉の如き深紅の瞳が一際目を引いていた。

その名を『ウイス』

後世にて”名の無き英雄”と称えられる存在である。

——『中立者・付き人ウイス』と『人種の裁定者ギルガメツシユ』が交錯する時、物語は始まり、加速する——

4 悲劇で終わりの物語ではない

ギルガメツ^{慢心王}シユとの出会い

美と豊穣、戦を象徴する女神との遭遇

英雄王の唯一無二の親友との邂逅

残念女神の姉である冥界の女主人との巡り会い

スカサハとの出逢い

決して彼女との出逢いは穏やかなものではなかつたが

おっぱいタイツ師匠

次元を歪め、青と紅の軌跡を大気に残し両者は刃を交え、絶大な力を波及させた。両者の激突は世界が滅亡する瀬戸際まで及び、影の国は瞬く間に焦土と化すことになつた。

権能という超越した力を有し、人類を玩具の様に扱つていた傲慢な神々の裁定

怪物に至ることが定められたとある一人の女神との遭遇

卑劣な手段にて純潔を脅かされていた森の狩人である女性の救出
その後、とある女神の手により彼女は獣に変えられてしまつたが
彼女の純潔を脅かした下手人は壁の染みとなつた。

全てに裏切られ、途方に暮れていた魔女との邂逅

「王」としてあらゆる自由を奪われた孤独なる王との語らい
彼はイスラエルの絶対者にて唯一無二の王、神々の意志のもと王として創られた存在
であつた。

”施しの英雄”と名高い英雄との交戦

とある国の妃である王女とその娘達の救出
彼女は誰よりも祖国と民を愛していたが故に、祖国を蹂躪した敵国を許すことはな
かつた。

彼女の最後は敵国の多くの兵士達を蹂躪した後の戦死であつたと聞き及んでいる。
不思議なことに蹂躪した敵国都市の市民の死傷者はゼロであつたが。

理想の王として心を殺し、誰よりも国に尽くした王への献身

自己承認欲に飢え、國を滅ぼした少女との遭遇

全て遠き理想郷アヴァロにてビーストに至る可能性を秘めた獣との語らい

後世にて聖女と称される少女への献身

彼女には勉学と戦闘のノウハウを教唆した。

彼女の未来に幸あれ、と望んで

戦場という血塗られた地獄で己の身を犠牲に死傷兵達へと奉仕し続けた女性との出
会い

死という概念が存在しないウイスは数多の英雄達との出会いと訣別を繰り返した。

今や地上は人類が支配する時代

神代は終わりを迎へ、西暦を経て人類は地上で最も栄えた種となつた。

かつて世界を支配していた超常の存在である神々は世界の裏側へと姿を消した。

時は2000年代

人類の最盛期とも言うべき時代が到来し、人が自らの足で道を切り開く時代である。

標高6000メートルの雪山に存在している各国共同で作られた特務機関
名を『カルデア』

人類の繁栄と存続を確実なものとすべく創設された人理継続保障機関フイニス・カル
デア

時計塔の天体科を牛耳る魔術師の貴族であるアニムスファイア家が管理し、日々職員達
がカルデア表面の文明の光を観測し続けている。

全ては未来の人類社会の存続を保障するために
カルデアにはウイスの姿もあつた。

現当主であるオルガマリー・アニムスファイアからのスカウトを受け、足を踏み入れた
所存である。

何でもレイシフト適正とマスター適正を有しているとのこと

ウイスは逆立つた白髪を揺らしながら、紅き瞳で周囲を見渡す。
影の国からの久しぶりの遠出だ。

「君が波風晃人君だね。僕の名前はロマニ・アーキマン。医療部門のトップだ。皆から
はDr. ロマンと呼ばれているよ」

「フォウ、ンキュ（あ、ウイス）」

だがカルデアには全て遠き理想郷^{アヴァロ}に隔離されているはずのキヤスパリーグの姿が

あつた。

旧友であるソロモン王の姿も

次の瞬間、キャスパリーグの名を口にしようとしたウイスの頬にキャスパリーグの強烈な一撃が直撃した。

特異点F 『炎上汚染都市：冬木』

世界の滅亡は余りにも突然であり、残酷であつた。

人理継続保障機関・カルデアにより人類史は100年先まで安全を保障されていた。しかし、2015年、突如、近未来観測レンズ・シバによる未来の観測領域が消滅これが意味することはつまり――

――2016年人類滅亡――

カルデアは急遽、人類滅亡の原因を探ることを決意

観測できない未知の領域を探索すべく、未だ実験段階の第六の実験を決行する。

過去に発生した特異点の原因を解明ないしは破壊することを目的とした禁断の儀式

――その名を聖杯探索――
グランドオーダー

人類史の存続を確実なものとすべくカルデアは運命と戦うことを決意する。

だが、第六の実験である靈子転移レイシフトを決行しようとした刹那、勃発した中央管理室を巻き込む大爆発

世界中から集めたマスター候補生が数合わせの一般人を除いて全滅

瞬く間に中央管理室は死が蔓延する地獄へと変貌を遂げる。

真っ赤に染まるカルデアスを背景に中央管理室は業火に包まれ、人類史は何者かの手によつて無残にも焼き尽くされてしまつた。

「酷い……」

息を切らし、48人目のマスター、藤丸立香が中央管理室へと足を踏み入れる。

肩にキヤスパリーグ、カルデアの不思議生物であるフオウを乗せながら

「これじゃ、この場の皆は……」

「いや、それは違うよ、立香君。恐らく……」

遅れてこの場に居合わせたDr.ロマニの声を皮切りに突如、中央管理室内に甲高い音が響く。

コフインの扉から腕が生え、否、力任せに突き破られ、コフインそのものが粉微塵と

化していた。

ひしやげたコフインの扉を乱暴に引っぺがし、一人のマスター候補生がコフインから這い出てきた。

放心する立香を他所にそのマスター候補生がコフインから這い出てきた。
天へと突き抜けるように白髪を揺らす長身の男性

47人のマスター候補生の一人としてコフイン内でレイシフトに備えていた波風晃
人、ウイスその人であった。

ウイスはその紅き瞳で周囲を見据えている。

「甘いですね。この私がコフインの爆発程度で死ぬと思つてはいるのですか？」

ロマニは苦笑い、立香は驚愕に声が出てこない。

本人は五体満足、爆発の影響を毛ほども受けていなかつた。

中央管理室は燃えに燃え、崩壊を続け、カルデアスだけが動き続ける。

その後、原因の解明をすべくDr.ロマニは中央管理室から離れ、藤丸立香とウイス
は瀕死の状態のマシユの手を握り続けるのであつた。

—システム 靈子^{レイシフト}転移開始します。座標 西暦2004年
1月30日 日本冬木

—『特異点F 炎上汚染都市 冬木』開幕—

「な、これは……」

「冬木の町が……。これが特異点の影響ですか……」

「フオウ……（こりや酷い……）」

無事、靈子^{レイシフト}転移にて過去へと跳んだ3人と1匹

舞台は聖杯戦争が開催された2004年の日本の冬木

彼らは今、文字通り過去の冬木の大地を踏み締めていた。

日本の中枢として発展を遂げてきた冬木

だが、既に近現代の煌びやかな都市の輝きなど存在せず、今や血と死者が蔓延する町へと変貌を遂げていた。

至る場所が激しく炎上し、街並みは大きく崩れ、人ならざる者の気配が漂っている。誰もが目の前に広がる惨状に言葉が出なかつた。

「フォウ、フォフオウ！（それにもマシユの姿はドスケベだね！）」

「フォウさん、私に何か言つていいのですか？」

キヤスパリーグがこんな状況でもあるにも関わらず、けしからんことを述べる。

マシユは理解できずに首を傾げていたが

「ファツ、フォウー！？（なつ、やめろー！？）」

キヤスパリーグのモフモフの頬が左右に引っ張られる。

キヤスパリーグはウイスの縛りから逃れようとジタバタと暴れるが、当の本人はガツチリと掴み離さない。

ウイス達は荒れ果てた荒野と化した冬木の町を散策することを決意した。
今なおキヤスパリーグはウイスに掴まれたままの状態であつたが

—今、未来を取り戻す物語が始まる—



カルデアの所長、オルガマリー・アニムスファイアが逃げ惑う。

大量のスケルトンの群れが彼女へと肉薄し、命を刈り取ろうとしていた。
「何で、私ばかりこんな不幸な目に遭うのよ！」

「レフ、レフはどこ!? いつだつて貴方が私を助けてくれたじやない!?」

ガンドを放ち、命を刈り取るべく襲撃するスケルトン達を破壊する。

多勢に無勢な状況でも彼女の目は死んでいなかつた。

「アキトもこの場にいるのなら私を助けなさいよ！」

既にコフインの爆発で息絶えたであろう少年の名をオルガマリーは叫ぶ。

それ程までに彼女は精神的に追い詰められていた。

「マシユ・キリエライト、助太刀に入ります！」

「マシユ!?」

そんな絶体絶命の危機に駆け付けるはデミ・サーヴァントと化したマシユ・キリエライト

彼女はその手に有する巨大な盾で瞬く間にスケルトンを粉碎し、破壊し、叩き潰していく。

「オルガマリー所長、ご無事ですか!?」

「貴方は一般人枠の……！」

48人目のマスター、藤丸立香もその場に現れる。

後方にはカルデアの謎の生物であるフォウを肩に乗せ、悠々と足を進めるアキトの姿もあつた。

「フォウ、ンキユ？（ウイスは何かしないの？）」

「そうですね、援護でもしましようか」

キヤスパリーグの言葉を受け、ウイスがマシユ達を助太刀すべく動き出す。

親指を突き立て、両手の人差し指と中指を前方へと向け、照準を定めた。

指先に集束するはガンド特有の紅き魔力

—スカサハ直伝ガンド—

次の瞬間、前方で奮闘するマシユを援護すべくスカサハ直伝ガンドが火を噴いた。ガンド、それは対象を指差すことで体調を崩させる効果をもたらす呪いの一撃である平行世界ではその身に宿る魔力の高さが影響し、物理的ダメージを与えるとされるフインの一撃にまで昇華した少女もいたが、ウイスが放つガンドは一線を画していた。

それは正に暴風、ガンドの名を被つた別の何か

指先からガンドが放たれた瞬間には、既に対象に到達しその身を破壊している。

打つて、打つて、打ちまくる。

手加減することなく、手心を加えることなくただひたすら打ち続ける。

この数秒の間に放されたガンドの総数は数百、数千、いやそれ以上

尽きることのないエネルギーから生み出されるガンドの嵐は辺り一帯を即座に更地へと変えた。

骸骨の兵士達は為す術なくその身を崩壊させ、否、ガンドが直撃した瞬間に爆散する。

一体、また一体とオルガマリーを包囲していた骸骨の群れは瞬く間に塵と化していく。た。

「ファ——ww（ちょ、やりすぎww）」

ウイスは無心にガンドを射出し続け、まるで作業の様に破壊し続ける。

至る場所にクレーターが出来上がり、爆風と爆煙が生じ、汚い花火が生まれる。

「ちよつとアキト！ 私達まで殺す気!?」

「マシユ・キリエライト、離脱しました！」

オルガマリーを抱えたマシユが戦線離脱することに成功する。

マリーはヒステリーを起こしかけていたが

見れば感情を有さないはずの骸骨の兵士、スケルトン達が撤退を始めている。
だが此処で奴らを逃がす理由など存在しない。

「流石になかなかの逃げ足の遅さですね」

「ですが此方に敵意を向けてきた相手をおめおめと逃がすと思いませんか？」

ウイスが右手の人差し指の指先を天へと掲げ、莫大なエネルギーを一点に集束させる。

膨大なエネルギーが一点に凝縮・集束し、圧縮されていく。

その絶大なる破壊の閃光が天へと届く勢いで膨れ上がり、巨大な球体へと変化する。

驚愕を隠せないマシユ達を他所に、ウイスはその破壊の一撃をスケルトン目掛けて振り下ろした。

瞬く間に、スケルトンの軍勢は塵と化し、消滅する。

同時に、冬木の大地そのものが震撼し、見渡す限りの大地が消失した。

その日、日本の冬木にてハルマゲドンが如き大爆発が起き、見渡す限りの大地が消失するのであつた。



無事、オルガマリー所長と再会することに成功した立香達

「ご無事で何よりです、所長」

『てつきりあの爆発を受け、亡くなられたとばかり……』

「勝手に私を殺さないでくれるかしら、ロマニ?」

D r. ロマニは殺氣溢れるマリーの迫力に押され、口を閉ざす。

「それよりも!」

「波風晃人」つて絶対に偽名でしょ!?

「……?」

詰め寄るマリーに対し、ウイスは首を傾げる。

「白を切る気!? どこの世界に瞳が紅くて白髪の日本人がいるのよ!」

マリーの言及は止まらない。

「それに、他のマスター候補生が瀕死の重傷にも関わらず、何故アキトは五体満足なの!?」

『あの、所長。非常に申し上げにくいのですが、本人はコフインを突き破つて出てきたんです……』

「ハアアアアアア——!?

甲高いマリーの絶叫が響く。

「あと、さつきの神代級のガンドと宝具級の魔術についても説明して頂戴!」

『まあまあ、落ち着いてください、所長』

「ロマニは黙つていなさい!」

『ひえ……』

D r. ロマニ、あつけない。

「ドクター、この聖晶石を遣えれば良いんですね？」

『そ、そうだよ。召喚に応じてくれる英霊は完全にランダムだけどね』

「頑張りましよう、先輩！」

「ちよつと、そこ！ 所長である私を差し置いて、何勝手に英霊召喚を行おうとしているのよ！」

『うわ、不味い！ 所長に見つかった！？ 早く英霊召喚を執り行うんだ、藤丸君！』

「ロマニは黙つてて！」

『ひえ……』

「気付いてますか、マリー？ 貴方、既に死んでいますよ？」

「ハアアアアアア——！？」

マリーの絶叫と驚きは止まらない。

『凄いぞ、立香君！ これは確実にトップサーヴァントの反応だ！』

向こうでは召喚陣が光り輝き、周囲に途方もない魔力の本流が吹き荒れている。
世界に浸透する程の魔力、間違いない。

全英霊中、トップサーヴァントの反応だ。

「影の国よりまかり越したスカサハだ。お主をマスターと呼べば良いのか？」

黄金比の肢体を包むは全身タイツ

口元は黒いマスクで覆い隠され、表情を窺い知ることは出来ない。

彼女の王者としての霸気が周囲を圧倒している。

彼女こそ影の国の女王、スカサハ

『凄いぞ、藤丸君！一発である影の国の女王であるスカサハを引き当てるなんて！』

「凄いです、先輩！」

「フオウ、ンキュ……（いやこれは立香の運と言うより、ウイスの……）」

だが、当人であるスカサハはマスターである立香やマシユを見てなどいない。

スカサハは終始、マリーと戯れるウイスを鋭い眼つきで射抜いていた。

彼女の殺気に当てられたマシユ達は冷や汗ダラダラだ。

「私が折角、現界したというのに他の女性と呑気に話しているとは、良いご身分だな」

「ウイス!!」

一息でスカサハはウイスとの距離を詰め、その紅き朱槍を手加減することなく振りかざす。

頬にゲイ・ボルクの直撃を受けたウイスはその場から消え、その姿を虚空へと消失させた。

時を同じく、キヤスターとして現界したとある猛犬が途轍もない速度で飛来したウイスの直撃を受け、悲鳴を上げる。

流石、幸運D

最奥の洞窟には黒き騎士王、反転したブリテンの王が待ち望む。

人類最後の光、カルデア最後のマスター、藤丸立香を待つのは光か、闇か

それはまだ、誰にも分からぬ。

人理を崩壊させ、カルデアを爆破した下手人はほくそ笑む。

その身に危険が迫っていることに気付くこともなく、人理の崩壊を嘲笑うのであつた。

特異点F 『炎上汚染都市：冬木』の消滅まであと僅か